

ASF ウイルスはニホンイノシシにも感染し 豚と同様の症状と病変を引き起こす

ASF は、欧州に生息するヨーロッパイノシシに感染することが知られています。ASF が日本で発生した場合には、野生のイノシシ(ニホンイノシシ)を介したウイルスの拡散が懸念されますが、ASF がニホンイノシシに感染するか否か、また感染した場合の症状や病変については不明でした。そこで今回接種試験によりその検証を行いました。

農研機構は、現在東欧やアジアで流行している ASF(アフリカ豚熱)が、ニホンイノシシに感染するか否か、また感染した場合の症状や病変について検証しました。ニホンイノシシ 4 頭の筋肉内に ASF ウイルスを接種する試験を行ったところ、ASF ウイルスを接種したニホンイノシシは接種後 4 日目から全頭が元気消失し、食欲も低下しました。接種後 5 日目には 1 頭が、また 6 日目には 2 頭が死亡し、残る 1 頭も瀕死の状態となったため接種後 6 日目に安楽殺して、全頭を解剖検査に供しました。

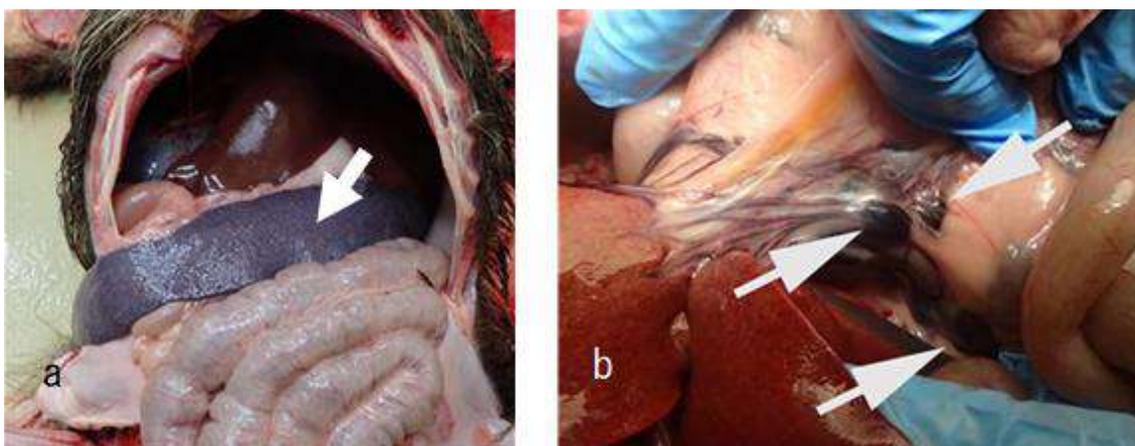


図 ASF ウイルスを接種したイノシシの解剖所見

a: 黒色調を呈して著しく腫大した脾臓(矢印)。b: 胃の周囲のリンパ節の暗赤色化(矢印)。通常周囲の脂肪組織にまぎれて目視しにくい胃の周囲のリンパ節も色調の変化により容易に確認できます。

解剖時の肉眼病変としては、ASF に特徴的な脾臓の黒色化と著しい腫大(図 a)ならびに腹腔内リンパ節の暗赤色化(図 b)が全頭で確認されました。また ASF ウイルス感染豚と同じように肺水腫や消化管粘膜の出血、血液の凝固不全がみられました。これらの病変は、ASF と他の疾病との鑑別において重要な所見であると考えられます。

検査では ASF ウイルスを接種したニホンイノシシの脾臓は全て黒色調を呈し、著しく腫大

していました。また胃の周囲のリンパ節をはじめとする腹腔内のリンパ節は暗赤色調を呈し、血液凝固が不全になるなど、いずれのニホンイノシシでも ASF に感染した豚と同様、急性型の ASF に特徴的な所見が認められました。

遺伝子検査によりウイルスの排泄状況を調べたところ、接種後 3 日目には全頭で循環血液中および鼻腔ぬぐい液中に ASF ウイルスの遺伝子が検出され、うち 2 頭では唾液中にも、さらに 1 頭では糞便中にもウイルスの遺伝子が検出されました。

以上のことから、現在流行している ASF ウイルスは、ニホンイノシシにも感染して、豚と同じような症状を引き起こすとともに、体外へも排泄されることが確認されました。

本試験の結果から、現在広く流行している ASF ウイルスはニホンイノシシにも感染し、豚と類似した症状を引き起こすことが確認されました。国内に侵入した場合は、野生イノシシによる ASF の拡散に対して警戒が必要です。本試験で得られた知見は、農林水産省が主導する本病の防疫対策に活用されます。

日文发布全文

https://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/press/laboratory/niah/134041.html

文: JST 客观日本编辑部编译